

Title	政策論題における競技ディベートを通じた議論能力の向上
Author(s)	岩上, 祥子
Citation	平成27年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書. 2016
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54671
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

平成 27 年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書

ふりがな 氏 名	いわがみ しょうこ 岩上 祥子	学部 学科	法学部法学 科	学年	3 年
ふりがな 共 同 研究者名	むらかみ たかまさ 村上 堯優	学部 学科	法学部法学 科	学年	3 年
	さくま あつし 佐久間 惇		法学部法学 科		
アドバイザー教員 氏名	松行 輝昌	所属	全学教育推進機構		
研究課題名	政策論題における競技ディベートを通じた議論能力の向上				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。				
<p>1. 研究目的</p> <p>研究目的は以下のとおりである。</p> <p><u>競技ディベートが議論能力向上にもたらす効果の大きさとその可能性を明らかにすること。</u></p> <p>世間ではよく、今の大学生には「議論」する力がないといわれているが、果たして、「議論する」力とは何か？また、その能力を向上させる環境は整っているのだろうか？</p> <p>そこで、2013 年 7 月から本学において結成された日本語競技ディベート団体を調査の拠点とし、「競技ディベート」という種目に秘められた可能性を明らかにすることを研究の目的とした。</p> <p>2. 研究計画</p> <p>研究計画は以下の通りである。</p> <p>8 月中旬：論題（ディベートを行うテーマ）発表</p> <p>8 月～11 月まで：論題についての調査</p> <p>9、10 月：他大学（神戸大学・立命館大学・京都大学・関西学院大学等）との練習試合</p> <p>11 月：全国大会、地域大会出場および他地域の関係者へのヒアリング</p> <p>日本ディベート協会主催秋季ディベート大会（以下 JDA 杯）、</p> <p>九州大学ディベートサークル主催九州大会（以下 QDC 杯）</p> <p>全日本ディベート連盟主催全日本大学ディベート選手権大会（以下 CoDA 杯）</p> <p>3. 研究方法</p> <p>研究方法は以下の二つである。</p> <p>(1) 大会出場者・出場経験者へのヒアリングや、大会出場を通じたディベートの議論能力向上</p>					

効果の検証

(2) 大会運営者や大会の審査員へのヒアリング調査、および文献資料調査によるディベートの可能性、議論能力に及ぼす効果の検証

<ヒアリング調査概要>

日時：10月～11月の大会開催日、または練習試合開催日、11月29日開催のセミナー

対象：(Q1～3)については、大阪大学生(5)、立命館大学(2)、関西学院大学(2)のディベート団体に所属の者、あるいはディベート経験のある者。(0内は人数。)

(Q4)については、ディベート運営・指導経験者(2)、大会審査員経験者(2)。

内容：以下の項目について。

- Q1 競技ディベートとディスカッションで異なる点は何だと思うか
- Q2 競技ディベートによってどのようなスキルが身についたか
- Q3 上記の理由はなぜか
- Q4 競技ディベートでよりよい学びを得るために何をすべきか
((2)の対象者のみの聞き取り項目)

なお、今回扱うディベートは「競技ディベート」といい、客観的データなどを用いて第三者を説得できた者が勝利する、勝ち負けを競うディベートである。[1]

4. 先行研究における研究結果と本研究との差異

ディベートの議論能力に及ぼす影響を調査した研究は、過去にも複数存在する。

例えば、教育ディベートが学生の議論の能力を向上させているかについて、高校のカリキュラムを用いて定量的に調査を行うことにより、議論の能力特に「客観性」が授業前と後で向上していることを示した。[2] (P6) また、大学における教育ディベートの意義を、「ディベートが肯定・否定の対立形式をとることと、司法手続の対審構造との関連」や、「証拠資料活用形式の意義」という法教育の観点から指摘された研究もある。[3] (P19) その研究によれば、「教育ディベートでは、証拠資料の引用、引用開始・引用終了の明示、情報源の明示等が厳格に求められる。また、相手側の利用した証拠資料の信頼性・証明力を吟味する能力が必須となる。このような経験により、「学生・生徒は事実と意見の区別、情報の収集力・選別力・評価力など、批判的思考の基礎能力を身につけると予想される」と記されている。

一方で、大学生の、しかもサークル・団体活動という年間活動を通して議論能力が向上するか否かといった研究については、公式になされているものは非常に少ない。また、教育ディベートではなく、競技ディベート(勝敗を重視するディベート)において、議論能力の向上について論ぜられたものも同様に少数である。大学生という、議論能力がある一定程度既に培われているような年代に効果があるのか否か、また、授業という時間に拘束され、効果が十分に見込まれにくい形式ではなく、サークル活動や練習試合、全国大会といった時間が長期的に確保されている場合において、議論能力はより効果的に向上するのか、といったことは明らかにされていない。本稿においては、この点に注目し、大学生が授業ではなくサークル活動のなかで行う競技ディベートが、議論能力の向上に資するかを記す。

5. 研究結果等

研究結果を、(1) 出場大会およびその成績、(2) 大会参加者や審査員からのヒアリング結果、そして最後に (3) ディベートの可能性に関する提言 について、それぞれ詳述する。

(1) 出場大会およびその成績

以下、本年度と昨年度の成績を比較する。

CoDA 杯 (全国大会) : 混合チームがベスト 8 入り (予選 3 勝 1 敗)

昨年 : 1 勝 4 敗、予選敗退

QDC 杯 (全国大会) : 総合 3 位 (2 勝 1 敗)

昨年 : 出場なし

JDA 杯 (全国大会) : 2 チーム出場、1 勝 2 敗、2 勝 1 敗 (うち 1 チームは 13 位)

昨年 : 3 敗、結果が低すぎたため順位なし

以上より、昨年度 (14 年度) の各種大会においては、いずれの大会でも勝利が挙げられていなかったにもかかわらず、本年度の大会においては、新たに出場した大会で 3 位入賞になるなど、一定の結果が得られた。

(2) 大会参加者や審査員からのヒアリング結果

ディベートを実際にはじめた学生、および審査員からのフィードバック、文献などを通し、以下の点が明らかになった (下表の通り)。

質問項目	主な回答
Q1 競技ディベートとディスカッションで異なる点は何だと思うか	<ul style="list-style-type: none">・議論のルールがあらかじめ設定されていること・自らの意見ではないほうの主張も行わなければならない点 (大阪大学 3 年ほか 3 名)
Q2 競技ディベートによってどのようなスキルが身についたか	<ul style="list-style-type: none">・批判的に物事を見る力 (大阪大学 3 年ほか 3 名)・相手を説得する技術です。(立命館大学 2 年)・調査能力、資料の中のデータの意味を読み解く力 (大阪大学 2 年ほか 2 名)
Q3 上記の理由はなぜか	<ul style="list-style-type: none">・自らの意見ではない立場で議論を行わなければならないことと、ジャッジが主観を入れないために、議論だけでジャッジの首を縦に振らせないといけないから。(大阪大学 2 年)

<p>Q4 競技ディベートでよりよい学びを得るために何をすべきか ((2)の対象者のみの聞き取り項目)</p>	<p>・大会への出場を繰り返すことにつきます。 ・ディベートの振り返りを行うこと。(大阪大学3年)</p>
<p>以上のようなヒアリング調査を通し、二つのことがわかったといえる。 ・競技ディベートは、一般的なディスカッションとは異なるが、中でも実際にディベートを行った者の意見としてあげられる特徴には共通点があること ・これらの特徴こそが、競技ディベートが議論能力の向上に繋がる所以であると考えられること 以下、特に特徴としてあげられた共通点を詳述する。</p>	
<p>①肯定側と否定側に機械的にわかれる 基本的に相手からの反論を前提に議論を組み立てるので、どちらの立場のリサーチ・議論構築も行う。実際の試合においても、自分がどちらの主張を支持しているかは関係なく、ランダムに肯定・否定を振り分けられ試合をすることになる。 →肯定側と否定側という二つの立場から物事を考えられるような視野の広さを持つことができる力に繋がる。実際、批判的に物事を考える能力が鍛えられたという意見は、ディベートを経験した人に聞かれた(質問への回答の通り)。</p>	
<p>②厳密なルールの存在 競技ディベートでは、話す順番・手順は以下のルールにのっとり試合を行う。</p>	
<p>肯定側立論*→否定側質疑→否定側立論→肯定側質疑→否定側第一反駁**→肯定側第一反駁→否定側第二反駁→肯定側第二反駁</p>	
<p>*立論… 一番初めに提出する議論。肯定側では、現状の問題点が論題を導入することで解決されること(=メリット)を、否定側では、プランが導入されて発生する問題(=デメリット)を示す。また、そのメリット・デメリットが如何に重要か、深刻かを示す。 **反駁…反論のこと。第一反駁では相手の立論および自らの立論に対して行うことが、第二反駁では議論の決着をつけ、最終的に自分たちの議論が勝っていると主張することが、それぞれ求められる。</p>	
<p>ほかにも、テーマは必ず賛否がはっきり分かれるように設定される。たとえば、今回であれば以下のような論題の設定がなされた。 ・「日本は、公共の場におけるヘイトスピーチを法的に禁止すべきである。」(2015年JDA杯、QDC杯論題) ・「日本は公職選挙法で定める全ての選挙について、投票の棄権に罰則を設けるべきである。」(2015年CoDA杯論題) また、議論の評価の仕方も、一定のルールに基づいている。それは、主張と理由には、それを支える客観的なデータの裏付け(=根拠)が求められることである。滝本哲史氏の「武器としての決断思考」[4](P195~202)においても、情報収集能力はディベートないしは意思決定において非常に重要であると説かれている。実際、JDA杯やQDC杯のために、大会で散見され</p>	

たエビデンスを含め、国立国会図書館にしかないヘイトスピーチについての文献の調査を行った。その文献は以下の通りである。

「特集 ヘイトスピーチ」 掲載誌 じんけん：心と心、人と人をつなぐ情報誌 (405) 2015-01 p.4-7
「特集 ヘイトスピーチを考える」 掲載誌 じんけん：心と心、人と人をつなぐ情報誌 (393) 2014-01 p.4-7
「ヘイトスピーチ」をめぐって 掲載誌 地域と人権 (370) 2015-02 p.21-32
「ヘイトスピーチと在日特権」 井上 太郎 掲載誌 ジャパニズム 14 2013-08 p.108-113
書評 安田浩一著 ヘイトスピーチ 「愛国者」たちの憎悪と暴力 浅尾 大輔. Kokko = こっこう：「国」と「公」を現場から問い直す情報誌 / 日本国家公務員労働組合連合会 編. (1)2015-9 p.77-79
人種差別的ヘイトスピーチ：表現の自由のディレンマ (1) 長峯、信彦 早稲田大学法学会 1997-01-30
エリック・ブライシュ著／明戸隆浩他訳『ヘイトスピーチ：表現の自由はどこまで認められるか』 榎、透、Enoki、Toru 法政大学大原社会問題研究所 2015-04-25
レイシズムと外国人嫌悪 小林真生／編著、駒井洋／監修 明石書店 2013 (移民・ディアスポラ研究；3)
イギリスにおけるヘイト・スピーチ規制法の歴史と現状 奈須 祐治 掲載誌 西南学院大学法学論集 48(1) 2015-06 p.260-207
イギリスのヘイト・スピーチ関連法令 奈須 祐治 掲載誌 西南学院大学法学論集 48(1) 2015-06 p.160-98
日本における国際法の国内的実現：「間接適用」という方法：ヘイトスピーチ事件(京都地裁判決、平成 25 年 10 月 7 日)を題材として 妻木 伸之 掲載誌 白門 / 中央大学通信教育部 [編] 66(8) (通号 785) 2014-08 p.28-39
在日コリアンに対するヘイトスピーチとイデオロギーへの呼びかけ：ジュディス・バトラーによる「主体化」論を手引きに 郭 基煥 掲載誌 現代社会学理論研究 / 日本社会学理論学会編集委員会 編 (8) 2014 p.39-54
いかにしてヘイトスピーチに立ち向かうべきか：内野正幸『差別的表現』を読む 鈴木 紫野

掲載誌 Quadrante : Areas、 cultures and positions = 四分儀 : 地域・文化・位置のための総合雑誌 : クアドランテ (16) 2014-03 p.237-246

そして、その調査に基づいて試合で使用したエビデンスが勝敗に影響したことからも、議論の評価にデータが必要であることが分かった。その勝敗への影響としては、JDA 杯において エリック・ブライシュ著/明戸隆浩他訳『ヘイトスピーチ：表現の自由はどこまで認められるか』 榎、透、Enoki、Toru 法政大学大原社会問題研究所 2015-04-25 を肯定側の際に用いたが、この文献によってヘイトスピーチ規制が拡大していくという議論について、海外で起きていないという主張を実証研究のデータとして支えることができたため、相手の理論のエビデンスよりも優れているとの評価を得ることができ、勝敗に影響した。

→このようにルールにのっとることは一見自身で考える力を阻むようにも思えるが、そうではない。初心者にとっては、議論の基本を押さえ、相手により説得的に伝える方法を、ルールを守るだけで意識できるようになる。

また、「根拠」を意識できるようになり、より相手に説得的なデータの使用方法や調査の要領もつかむことが出来る。

③熟練した判定者の存在

ディベートの議論の採否は、議論を聞いていた第三者による投票によって判定される。この第三者は通常はディベート熟練者で、その大会の性質に応じて変動する。例えば全国大会では、この審判はほとんど社会人の方々に、過去の全国大会の出場者であった人が多く、弁護士やコンサルタントといった議論する力を試されるような仕事をされている方々もいる。

→判定者という、実際に議論をする相手方ではない立場の存在は、議論を俯瞰的に捉える能力に密接にかかわる。ただ感情論では相手は動かされないため、様々な客観的指標や実証研究、ときには海外の論文をも用いて議論を構築する(上記②の通り)。ディベートのリサーチや試合を通して、客観的にものごとを評価し、意思決定を行う力を日頃から養うことになる。

(3) ディベートの可能性に関する提言

①ディベート機会の拡大について

-ディベートは、コミュニケーションだ-

ディベートは、勝ち負けを意識することにより、自然と「相手につたえる」力を育むことが出来る。実際、ディベートを続ける人は、「勝つことが楽しい」という人が多い。議論をする力をつけよう、と真正面から学ぶことよりも、実践を通して楽しく議論が出来るディベートは、大学生が議論する力を育むうえで非常に効果的であると考えられる。

また、ディベートの競技人口は中学生から社会人まで全国幅広く、ディベートを通じて多種多様な人と交流することが出来る。まだまだ競技人口が少なく、特に大阪大学はじめ関西のサークルでも人手不足が問題となっているが、これから競技人口が増えるような取組をおこなうことが求められているといえる。

②おわりに一網羅的な学びの必要性

ディベートは、以下のような能力と有機的に繋がっているとされてきた。[5] (P15)

- ・ プレゼンテーションスキル
- ・ スピーチスキル
- ・ 情報収集スキル
- ・ クリティカル・シンキング
- ・ ディスカッションスキル
- ・ ファシリテーションスキル

ただ、ディベートは、それだけを行うことが万能とは言えないだろう。なぜなら、ディベートでは勝ち負けがつくため、これがモチベーション維持に資する一方、競技やルールが存在、客観的データ（5、②②および③参照）を意識するあまりに、説得的な議論や日常生活における議論能力の育成と時にかい離してしまうからであるからである。例えば、早口でまくしたて、情報量を多くすることで相手を圧迫し、議論を優勢に進めるようなことや、データばかりを並べた分析の仕合いで、感情論が完全に排除されてしまう状況も起きている。

したがって今後は、より包括的に議論を行う能力を育めるような体制を、関西のみならず全国で協力しながら、そして様々な手法を模索しながら構築することが求められている。この1例として、「アフターディベート」という取組を視察してきたので、最後にその紹介をする。

①アフターディベートとは

大会後に、もう一度自分の出た試合の音源やビデオを鑑賞し、論題の内容や自分の練習方法を振り返る時間を作り、グループで反省を行ったりアドバイスをもらったりする機会のことである。

②アフターディベートの目的

- ・ 課題意識を持ったうえで、自分の議論や試合を振り返ることにより、議論運用能力の向上を図る。
- ・ 目標設定や、試合前の練習から一貫して次につながるディベートを行う。
- ・ 議論に対して自分なりの結論を出すことで、拡散した思考の収束をする。説得力の高い議論を行う。人格との分離を引き戻すこと

上記のような「ディスカッション」も効果的に取り入れることによって、今後競技ディベートを一層発展させ、議論能力向上を図っていくことが求められる。

参考文献

- [1] 特定非営利活動法人 全日本ディベート連盟 HP <http://www.coda.or.jp/static/debate>
- [2] 青柳 西藏、伊丹 悠人、下田 宏、石井 裕剛、富江 宏、北川 欽也
「教育用ディベートシステムを用いたカリキュラムの実践と批判的思考態度醸成効果の評価」
ヒューマンインタフェース学会研究報告集 2008年
- [3] 角松 生史「大学教育における「教育ディベート」手法活用の試み―「法教育」の観点から―」大学教育 2004年
- [4] 滝本 哲史「武器としての決断思考」講談社 2011年
- [5] 茂木 秀昭 「身につけるディベートの技術」 中経出版 2005年